

JANU

国立大学協会情報誌
Quarterly Report

April 2007

vol.7

◆OPINION

前ユネスコ日本政府代表部
特命全権大使

佐藤 禎一氏

◆連載企画

支部通信

◆学生からのメッセージ

テレビ番組製作サークル
信州大学

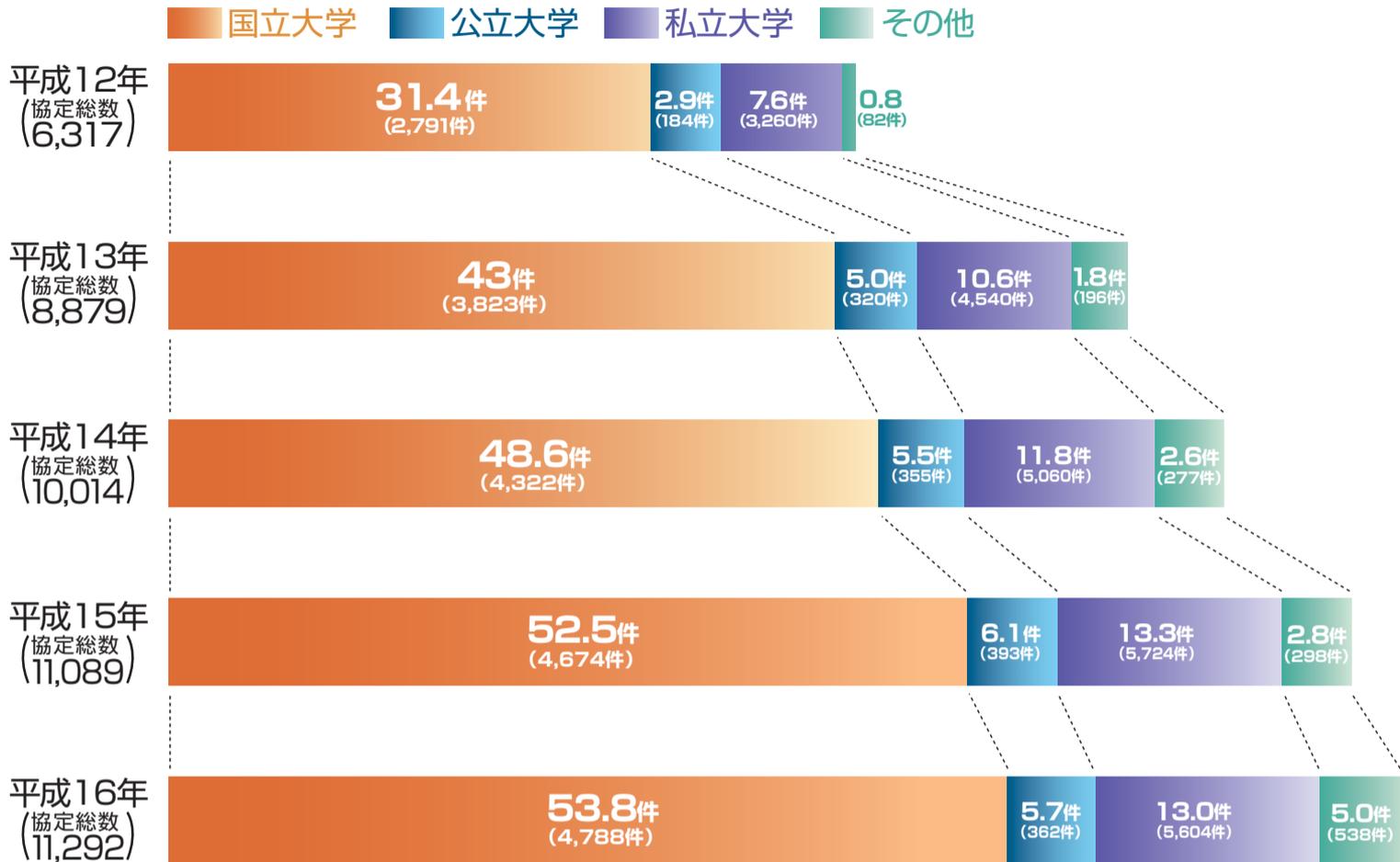
STUDIO RiZE

**国立大学の
国際交流**

海外大学との国際交流の協定状況

交流協定数は過去最高に

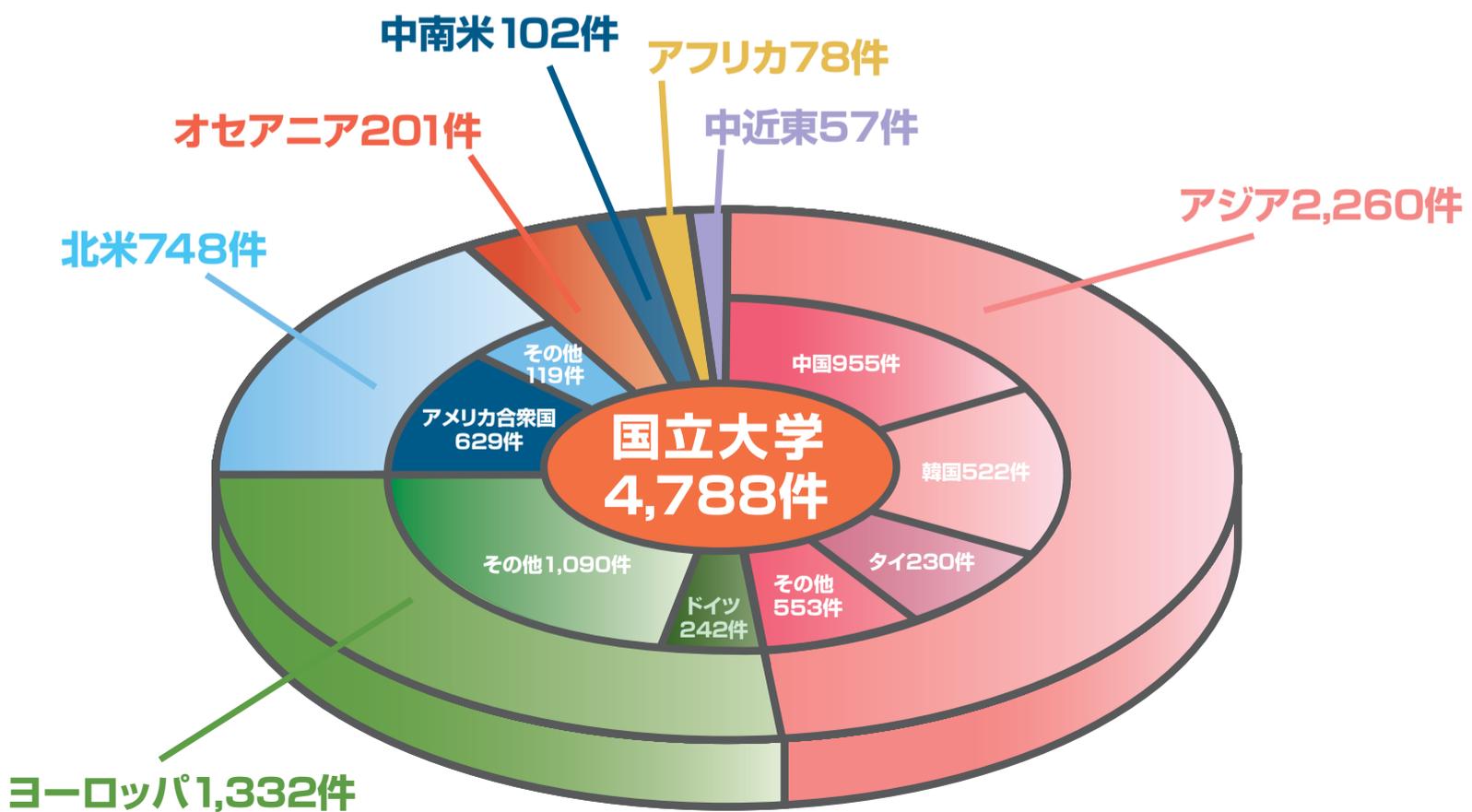
交流の内容としては、日本人学生の派遣、外国人学生の受入れ、共同プログラムの実施、研究者の相互交流、共同研究の実施、国際シンポジウムの開催、情報交換等。



注: 1校当たりの交流協定数。()は協定総数を表す。
各年10月1日現在である。その他は、大学共同利用機関、国立高等専門学校等。なお平成15年以前の数値には、コンソーシアム形式の協定が、全ての外国側参加機関との間で個別に協定を締結しているものとみなして計上。

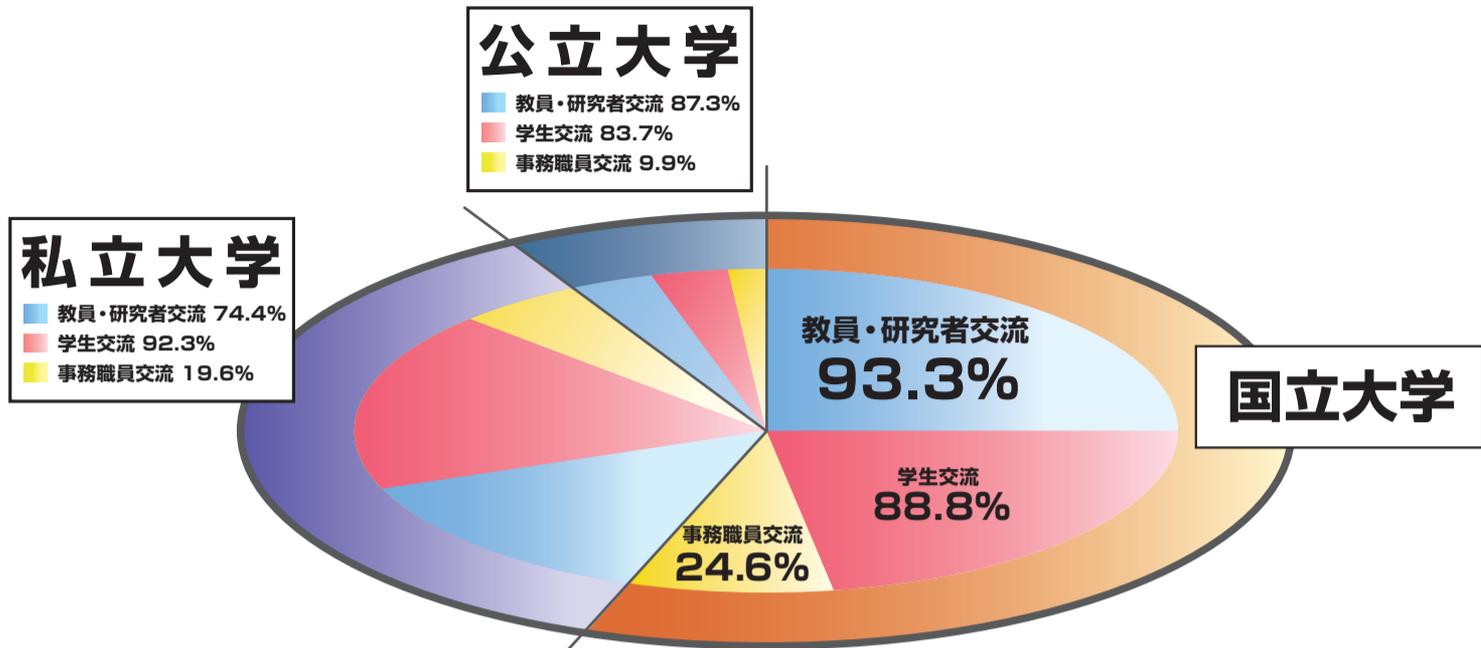
協定相手国はアジアが中心

我が国の国立大学が最も多く協定を締結している相手国は、中国、アメリカ、韓国と続いている。



協定先との交流の内容

国立大学は教員・研究者交流、私立大学は学生交流が主な協定。(複数の協定含む)

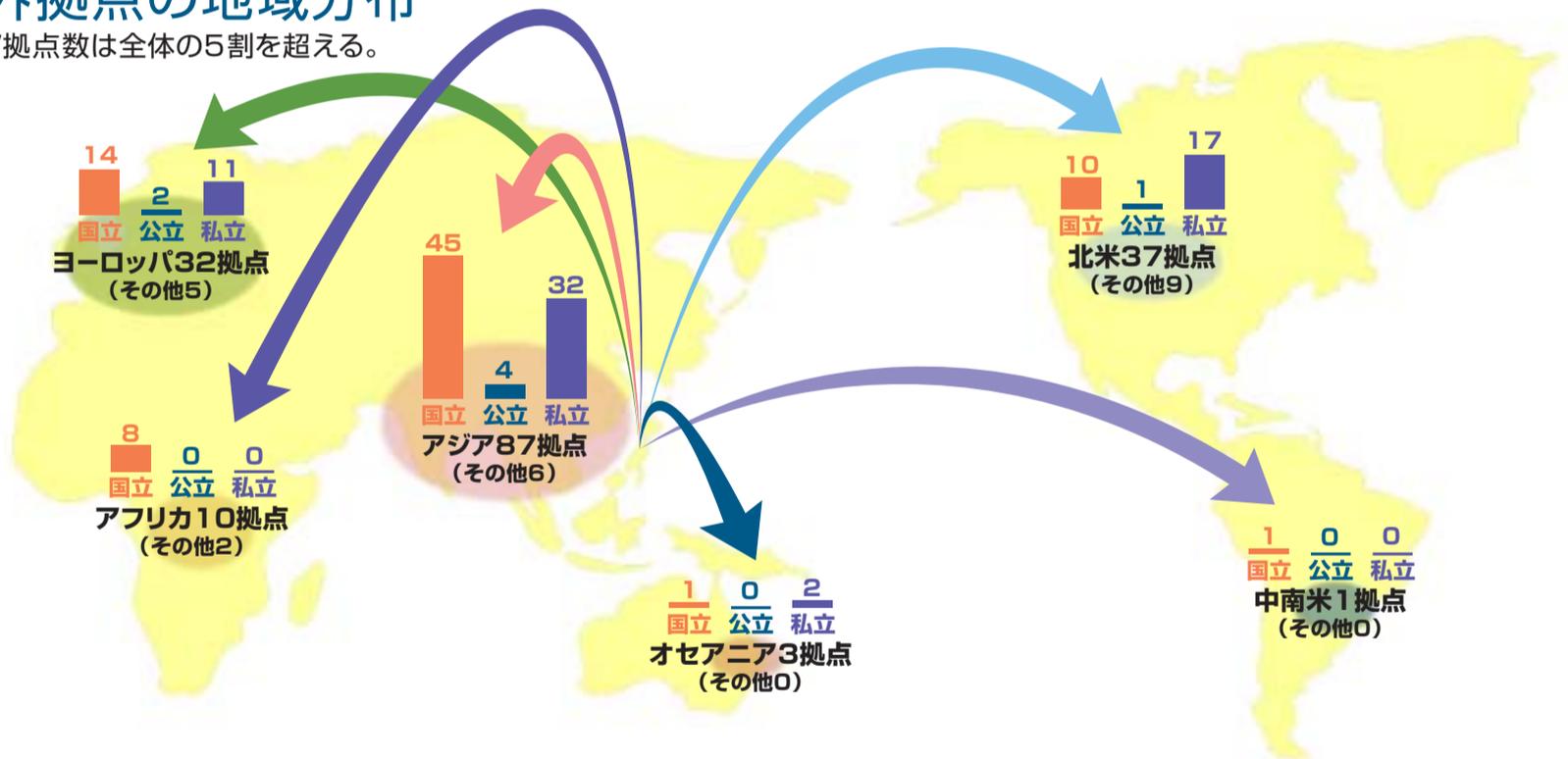


海外拠点の設置に関する状況

我が国の大学等が海外拠点を設置している地域は、アジアが最も多く、次いで北米、ヨーロッパ。この三地域で海外拠点全体の90%以上を占める。

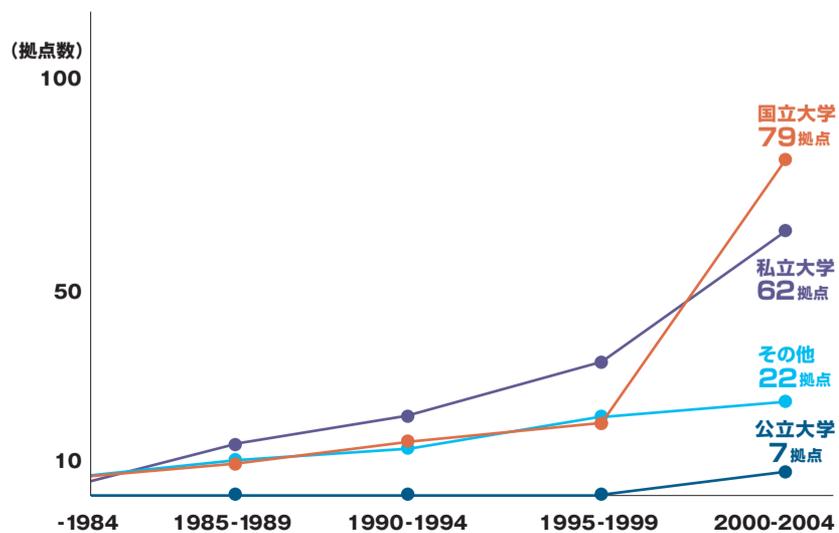
海外拠点の地域分布

アジア拠点数は全体の5割を超える。



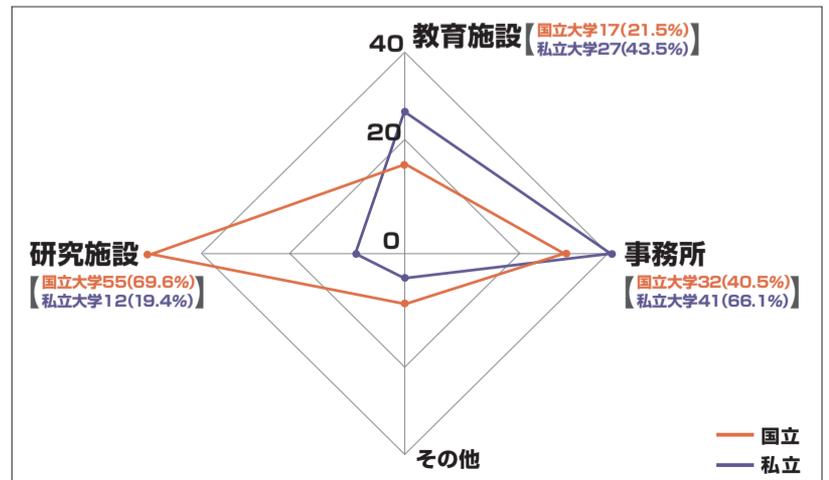
海外拠点の設置状況

国立大学の海外拠点は近年急激に増加。



海外拠点の施設の利用状況

国立大学は研究施設の利用が最も多い。



注:複数回答。
教育施設は学生の語学研修施設を含む。

留学制度の改善に向けて

わが国の将来を見据えた新たな留学制度を展開へと結びつけるため、これまで漠然と議論されていた留学制度の問題点について、国立大学協会では全国立大学にアンケート調査を行い、その結果を踏まえ改善策を取りまとめた。今後、さらに留学制度を充実させる必要があることを示唆するものである。

1 留学生の質の確保

- ・国、各大学による留学生育成ポリシーの確立
- ・日本留学生試験の活用等による選抜試験の改善
- ・HP等での大学情報の発信

2 留学生の受入体制の強化

- ・留学生受入プログラムの充実
- ・短期留学者の宿舎確保が課題
- ・留学生担当の専任教員や専門職員の配置

3 留学生の処遇

- ・優れた教育研究プログラムの提供
- ・効果的な予備教育の実施
- ・きめ細やかな相談体制の実施

4 留学生の卒業後のフォローアップ等

- ・留学生データベースを構築
- ・産学官連携による留学生の就職支援
- ・政府・産業界は留学生に何を求めるのかビジョンを提示する必要性あり

5 日本からの学生派遣の増加

- ・海外留学のモチベーション作り
- ・海外の大学との協力に基づく魅力ある海外留学プログラムの開発
- ・産業界等の海外留学に対する評価を高めるよう運動すべき

- ・留学制度にはまだ解決すべき問題点が多い
- ・要望内容は一つずつ具体化することが必要・政府の英断が望まれる

提言

政府/文部科学省

国際交流・国際貢献に果たす国立大学の役割

——世界の大学未来図の中でのビジョンが求められています——

前ユネスコ日本政府代表部特命全権大使

佐藤 禎一氏

法人化以後、国際交流を さらに広げる日本の国立大学

国立大学の法人化以後、各国立大学は名実ともに独立した存在として、自立性を高めながら特色を生かした教育・研究を実践しています。また、これまでの日本の大学がどちらかと言えば国内重視型であったのに比べ、ここ数年、海外に向けた姿勢が強くなっているのは非常に大きな変化でしょう。特に国立大学は、国際研究交流、留学生の受入れ・派遣、海外拠点の設置など、さまざまな面で国際交流・国際貢献活動を推進しています。しかし同時に、海外の大学や研究機関との関係を拡充させるためには、まず自らの大学の教育・研究内容、理念などを明確にし、その存在意義や対外的に提供できる人材や研究などの知的資源をアピールしていくことが大事です。



佐藤 禎一(さとう ていいち)

1941年 大分県生まれ。1964年 京都大学法学部卒業後、文部省入省。1992年 文化庁次長。1993年 学術国際局長。1994年 大臣官房長。1997年 文部事務次官。2000年 日本学術振興会理事長。2003年 ユネスコ日本政府代表部特命全権大使。2007年 東京国立博物館長(現職)。

教育の国際的な質の中で、 日本の大学の個性をアピールする

近年、教育の国際的な質を保証する試みが活発に行われています。たとえば、OECDでは15歳児を対象とした国際的な学力比較テスト(PISA)^{※1}を実施していますが、このテストを高等教育においても実施することが検討されています。18歳児の場合、国ごとに多様な教育システムに基づいて教育が行われているため、一元的な高等教育像を設定することはきわめて困難ですし、また評価指標についてもコンセンサスが必要です。

しかし今後、高等教育の分野で国際交流、国際貢献の大学間ネットワークを広げていこうとすれば、教育における国際的な質の概念を検証せざるをえません。その場合、日本の大学はどのような特性を海外に対してアピールしていくのか、ぜひそれを各国立大学に考えていただきたいと思います。現在の欧米志向の基準で比較すれば、残念ながら日本の大学はそれほど高い評価をえているとは言えません。しかし基準を変えれば、日本の大学には優秀な点が多々あります。たとえば、一般教養を学んだ後、専門教育を学び、職業能力を開発するという一種の全人教育を行ってきた伝統があります。そういう特色や長所はもっと評価されるべきでしょう。

また、これまで日本の大学は、アメリカやアジアの大学とは交流を深めています。今後は、ヨーロッパの大学との関係も視野に入れておきたいものです。EC域内では早くから大学同士の学位の相互承認などに取り組み、研究者・研究所交流も積み重ねてきましたが、さらにそれを発展させたボローニャ計画^{※2}が始まり、2010年を目標に統合的な教育エリアを構築しようとしています。言語、文化が異なる国々同士でどこまで共通化できるかという課題もありますが、大学同士のネットワーク化を通じて域内で共通教育を行う基盤整備は整いつつあります。また、EUだけでなく周辺諸国もこのプロジェクトに参加していますから、ヨーロッパに高等教育の非常に大きな統合的エリアが生まれつつあるわけです。この影響は決して小さいものではありません。

世界の中の日本の 国立大学のビジョンを明確に

国際交流・国際貢献の分野においては、留学生の受入れ・派遣の環境整備など国として一貫して推進すべき施策は不可欠ですし、その他、大学として改善すべき制度など課題はいろいろありますが、根本的には、それぞれの大学が世界の中でどのような役割を果たすかというビジョンをもつことがきわめて大切です。OECDは、最近、今後の高等教育に求められる要素として、世界中の大学とのネットワーク化、地域コミュニティの教育ニーズとの密着化、公的資金の新しい運営システムの導入などを指摘しています。これらは、世界の大学の将来の方向性を示していると考えられます。日本の大学も国内での生き方だけでなく、世界の大学ネットワークの中でどう生きていくかというビジョンを明確にもつ必要があるでしょう。

今後の知識基盤社会においては、大学、企業、社会、個人、いずれもナレッジ・マネジメント能力が問われます。知識の府としての大学がどのように自らの知を活用していくのか——それが今後の大きな課題だと思います。特に国立大学には、これまで多くの知の蓄積があります。その財産を国内的にも国際的にも有効に活用し、国際貢献を進めていくことは国立大学に課せられた重要な使命の一つです。そのための条件整備は進めていかなければなりませんし、課題が多いこともたしかですが、ぜひそれぞれの国立大学は、まさに英知を結集して、自らの個性と長所をふまえて、今後のビジョンを外に向けて堂々と主張していただきたいと思います。

※1 Programme for International Student Assessmentの略。国際比較により教育方法を標準化する目的で、義務教育終了段階の15歳児を対象に行われる学力比較テスト。2000年の第1回調査以後、3年ごとに実施されている。2003年調査では、OECD加盟国30ヶ国を含む41ヶ国、27万5,000人の生徒が参加した。

※2 2010年までに「ヨーロッパ高等教育圏」(European Higher Education Area)を建設することをめざして、欧州29ヶ国の教育大臣によって署名されたボローニャ宣言(1999年)に基づく教育プロジェクト。

From Hokkaido **室蘭工業大学**

JR札幌駅でPRイベントを実施

室蘭工業大学は、札幌地域の小中学生及び高校生を含む一般市民を対象にした、PRイベント「室蘭工業大学Informationキャラバンin Sapporo」を、昨年12月にJR札幌駅構内で実施しました。

このイベントは、同大学の特色ある教育・研究・地域貢献への取り組みを、札幌地域を中心とした市民の方に広く知ってもらうため、また今年度から学外試験会場を、宮城県仙台市のほか、札幌市にも設置したことから、受験生確保の機会として、実施したものです。

会場は、入試相談ブース、出前科学実験ブース、学校紹介ブース等を設け、高校生及びその父母・保護者が就職状況や学生寮での生活等について相談したり、小中学生及びその保護者らがオリジナルのアクセサリーを作成する等の科学実験を体験したり、大勢の旅行客等がパネルやパンフレットを見に訪れるなど盛況で、会場は熱気に包まれていました。今回のイベント「室蘭工業大学Informationキャラバンin Sapporo」は初の試みでしたが、同大学の教育・研究等を知らせる良い機会となりました。



入試相談に対応する職員

出前科学実験ブースの実験風景
(金属でオリジナルアクセサリーを作る)

学校紹介ブース(学科等紹介パネル展示)



「ミニFMラジオ」放送の様子

附属病院でのハートフルコンサート

山形大学 From Tohoku

「元気プロジェクト」、学生の主体性と創造性の先に何を見る

学生の主体的・創造的な活動企画に対する支援事業としてスタートした「山形大学元気プロジェクト」。応募12プランの中から5プランが採択されました。「ミニFMラジオ」・「学生広報誌」・「山大CM制作」・「病院コンサート」に加え「除雪ボランティア」といった地域密着型など、多岐にわたるプランが採択され、2006年度から実施されています。

プロジェクトはスタートしたばかりですが、採択プラン同士ばかりでなく、採択プランを中心として様々な

サークル・部活動の繋がりが生まれてきた点は、プロジェクトの成果の現れと捉えることができるでしょう。他にもプロジェクトに関連したイベントやワークショップも様々に開催され、学生の意識の高まりが感じられるようになりました。

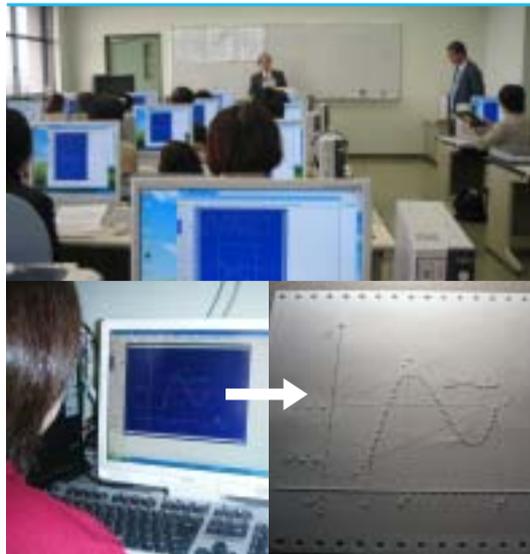
From Tokyo **東京農工大学**

**理系女性のキャリアパスと研究継続を支援：
「女性キャリア支援・開発センター」を開設**

東京農工大学では、科学技術振興調整費「理系女性のエンパワーメントプログラム」の採択に伴い、「女性キャリア支援・開発センター」を開設しました。センターでは、女子学生から女性教員、女性卒業生までの各段階を対象とし、理系女性がイキイキと研究活動に取り組むための支援活動を行っています。

学生向けの活動としては、理系のキャリア形成を支援する「キャリアデザイン講座」や、いま企業でも注目の「メンター制度」などに取り組んでいます。「キャリアデザイン講座」では、社会の第一線で活躍する

農工大の女性卒業生を招き、現在までのキャリア形成や研究活動について話してもらいます。これまでの講座では、企業と大学との違いや、出産と研究との両立など、卒業生ならではの生の声を聞くことができました。「メンター制度」では、さらに身近なロールモデルとして、学内の女性教員や女子学生が相談員となり、女子学生の研究生活・進路の相談に応じます。センターではこれらの活動を通し、農工大の女子学生が能力を最大限発揮し、理系研究者への道へとチャレンジしやすいような環境づくりを目指しています。



筑波技術大学 From Kanto・Koshinetsu

筑波技術大学情報・理数点訳ネットワークが発足一点字教材の整備を目指す

視覚障害者の大学進学は、いまや特別なことではなくなりました。しかし、視覚障害を持つ学生たちの学習環境は、まだ十分に整備されてはいません。特に、点字教材の準備は、学生本人や関係者にとって大きな課題となっています。

筑波技術大学障害者高等教育研究支援センターでは、点字教材の中でもとりわけ確保が難しい、情報・理数系点字図書の整備を目的に、文部科学省平成18年度特別教育研究経費による事業の一環と

して、情報・理数点訳ネットワークを立ち上げました。この専門点訳組織には首都圏の六つの点訳グループが参加し、今年度は、情報科学の基礎を学ぶのに役立つ13タイトルの図書の点訳に着手しています。完成した点字図書は、平成19年4月より全国の大学等を対象に希望に応じて提供する予定です。

From Tokai・Hokuriku **福井大学**

医工教教育・研究の連携 生命科学複合研究教育センター

福井大学生命科学複合研究教育センターでは、「生命科学並びに関連する広い分野」の研究推進、またその分野で活躍できる人材養成のため、学部を越えて様々な活動を行っています。

異なる専門分野を持つ研究者が、専門分野を生かしつつ協同して生命科学や関連する広い分野で新たな研究や教育を進めており、グラントを提供し、学部間学内共同研究交流会を開くなど学際的な学内共同研究を推進しています。また、人材育成として、大学院生

に学部・学科・専攻を越えた教育研究活動や共同研究に参加できる場を提供しており、医学系教員が工学研究科に赴き講義を行うとともに、必要や希望に応じ、工学研究科の学生が医学部での実験や実習を受けています。大学内に限らず、地元福井県の高中生や中学生に生命科学・医学や関連分野の実際に触れ、学んでもらう活動も行っています。この活動に参加している仲間を「生命科学クラブ」と称し、教育交流会や講演会など年間を通して高校の枠をとり活動しています。



学部間学内共同研究交流会

生命科学クラブの活動

生命科学クラブの活動

奈良女子大学 From Kinki

創立当時の「百年ピアノ」を修復し、ランチタイムコンサートを毎月開催

奈良女子大学では、創立当時(明治42(1909)年)に購入され、戦後永らく倉庫に眠っていた国産最古級のピアノを、平成17(2005)年に修復し、「百年ピアノ」として活用しています。

平成19年1月からは、小規模ながらも文化的な事業として、学生や教職員をはじめ、地域の皆様にも気軽に音楽を楽しんで頂けるよう、平日昼間(12時20分から50分までの30分間)に毎月1回、ランチタイムコンサート(無料)を開催しています。

第1回目となった1月25日(木)には、本学学生サークル「PIANO-FORTE」の7名により、クラシック曲や唱歌10曲が演奏されました。200名近い来場者は、会場となった記念館(重要文化財)の中で奏でられる優しい音色に耳を傾けておられました。



ほぼ満席となった第1回目の会場

豪華な装飾が施された「百年ピアノ」

From Chugoku・Shikoku **香川大学**

希少糖生産ステーションが香川大学に完成

香川大学では、農学部キャンパス内の「希少糖生産ステーション」の完成にともない、平成18年10月30日に関係者約100名が出席し、開所式を開催しました。希少糖は自然界にはほとんど存在しませんが、抗ガン作用や血糖値を下げる効果がある「夢の糖」とされてきました。これまで入手困難ではありましたが、この度の生産拠点の整備により医薬品や機能性食品など幅広い分野の研究、商品開発への応用が期待されています。このプロジェクトは、文部科学省の知的クラスター創成事業の一環として、香川大学や香川県、地元企業などが参加した産学官連携で、希少糖を活用

した新規産業の創出を目指しています。開所式では、学長挨拶、来賓からの祝辞、希少糖研究センター長から生産ステーションの建設構想から現在までの経過説明の後、記念講演が行われました。その後、ステーション前でテープカットを行い、希少糖の生産過程について施設を順次見学しました。

本ステーションは、希少糖の新たな生産拠点としての役割はもちろんのこと、今年度設置された大学院農学研究科希少糖科学専攻における課題探求能力を備えた高度人材育成の場として、希少糖に関する教育研究がより一層発展することが期待されます。



開所式で挨拶する一井学長

機器の説明をする何森センター長

熊本大学 From Kyushu

ボランティアで不登校の子供たちをサポート

熊本大学教育学部は、熊本市教育委員会との連携協力の一環として、平成14年度からユア・フレンド事業に取り組んでいます。この事業は、教育学部附属教育実践総合センターが窓口となり、学生ボランティアが熊本市内の不登校の児童・生徒の話し相手になるという支援活動を行う試みです。不登校児童・生徒の問題解決の一助となるよう、子どもたちと年代に近い学生の力を借り、何とかその改善の糸口を見出せないか、ということから出発しました。

現在学部2年生から大学院生まで約170名が登録しており、熊本市内の150名近い不登校児童・生徒の支

援を行っています。学生たちは、研修を受けた後、守秘義務を守りながらお互いの活動を話し合う年2回の意見交換会に参加するなどして、大学の教員や熊本市教育委員会の先生方の指導を受け活動しております。

これらの継続的な活動は、マスコミで取上げられるなど社会的にも注目されており、また、大学としてもこの活動を評価すべく平成19年度入学生からは「教育臨床体験演習」として単位化されることとなりました。

今後も地域貢献の一環として大学を挙げて取り組みが行われる活動です。



日本初・大学専門チャンネルで番組制作に取り組む

信州大学 テレビ番組製作サークルSTUDIO RiZE

昨年11月、信州大学は日本の大学では初めて独自テレビ局「信州大学テレビ」を開局しました。地元CATV局「テレビ松本」で毎日朝10時から夜10時まで放送される番組は、学生自身により企画から撮影・編集まで全ての作業が行われています。

初体験のテレビ番組制作は苦勞の連続

—STUDIO RiZE設立のきっかけは？

テレビ局の話は、僕が中嶋先生(中嶋聞多人文学部教授)のゼミに入った3年生のときに持ち上がり、最初の中嶋ゼミで番組を作る方向で進んでいました。ところが、途中からゼミの研究と番組制作は違うということで、STUDIO RiZEとして独立し、サークル活動として行うことになりました。STUDIO RiZEのほか、学内情報誌を発行する「CAmpus Bridge (CAB)」と、長野市にある工学部の「D-style」が信州大学テレビの番組を制作しています(畠山さん)

—実際にどのような番組を制作していますか？

僕は今年から、ひとり暮らしを始めたばかりの学生向けに、簡単にできる料理を紹介する、という番組を作り始めました(松井さん)

僕は信州大学で頑張るサークルの活動を、大学の外の人たちに紹介する番組を制作しています。第一回目は、よさこいサークルの活動を追いかけたものを予定しています(甲斐さん)

—番組作りで苦勞したことは？

メンバー全員、テレビやマスコミに関わる経験がなく、撮影から編集まですべてが初体験で苦勞の連続でしたね。そうしたなか、撮影研修やスタジオ貸し出しなどで、地元CATV局のテレビ松本には大変お世話になっており、とても感謝しています(畠山さん)

番組制作を通じて「放送する側の視点」を体感

—テレビ番組制作に関わって感じたことは？

放送する側の視点がどういふものかを感じられたことが大きいですね。私自身情報学のゼミに所属しており、情報の伝え方、受取り方について身をもって学べるのでとても勉強になります(桑田さん)

—今後STUDIO RiZEで取り組んで行きたいことは

サークル活動の紹介番組をより発展させた形で、将来は信州大学のスポーツ活動をとりあげる番組を制作したいと考えています。スポーツ活動は、学生だけでなく地域の人も関心が高いと思いますので(甲斐さん)

週1回、信州大学のニュース番組を制作するようになり初めて知ったのですが、様々なところで信州大学の先生や学生たちが顕彰されているんですね。こうした情報は、学生にはあまり知られていませんし、まして地元の人たちはもっと知らないでしょう。逆に、地域の人たちから「信州大学生はゴミ出しのルールを守らない」など、学生に対する苦情もたくさんあると思います。こうした情報を、テレビを通じてきちんと伝えていきたいですね。僕自身は大学を卒業したのですが、大学院に残り、テレビについての研究を続けながらSTUDIO RiZEをより一層発展させていきたいと考えています(畠山さん)



(プロフィール)

STUDIOrIZE (スタジオ・ライズ) 2006年に発足した、信州大学松本キャンパス内で活動するテレビ番組制作サークル。人文学部の学生を中心に現在メンバーは17人。

写真は左から松井雄二さん(人文学部3年・兵庫県出身)、甲斐弘史さん(経済学部3年・宮崎県出身)、代表の畠山克憲さん(大学院人文学研究科・長野県出身)、桑田裕子さん(人文学部3年・岐阜県出身)

「さ〜くる魂」/スタジオ・ライズ制作



信州大学のサークル活動を紹介。(2007年5月1日よりオンエア)

